

ExtraNews @ ベトナム

両国交流の架け橋となる人材育成のため2004年5月から運営を担ってきた「越日IT語学センター(VJILC)」が2008年3月、現地スタッフへ引き継がれ、グエン・フォン校長に全面委託された。

日本からスタッフを派遣し、約4年間にわたり日本の語学と文化を紹介してきた。学割制度があるハノイ校は、安価で日本人教師の授業を受けられると好評で、ライバル校ひしめく中、学生達に多大な人気を博した。また2005年2月にはトヨタ合成の依頼を受け、多国籍工業都市ハイフォンに分校を開き、新たに日本人講師を派遣、トヨタ社現地採用社員に日本語と礼儀作法を指導した。

ハノイ教育訓練局の認定を受けたVJILCは順調に生徒数を増やし、2006年春にはビルを移転し規模を拡大した。主に日系企業に就職を希望する学生が多く、夏休みには200人に及んだ。経営に参加してから延べ1000人を越える生徒が入学し、学んできた。4年間協力してくれた現地スタッフが2人今春日本留学を遂げた。微力ながら両国の交流に少しでも貢献できたと信じている。当会が手を引いた今、地元の人々によってさらなる発展を願うばかりである。親日ブームの風は吹き始めたばかりである。アオザイがそれになびいている。

VJILCの現状は、以下の通り報告いたします。

- (1) スタッフ1名 新規採用 (計2名となりました)
- (2) 学生数が150名程度で維持しています。
- (3) 法人契約 トヨタベトナムとKinden Vietnam 2社
- (4) 能力試験 2級 1クラス
- (5) 学費を上げました。

家賃が高くなって、まだ赤字ですが、年内に黒字出すように、スタッフ全員努力しています。また報告いたします。 フォン

「アジアの子ども達に未来を」常時ご寄付を集めています。

- ・名義「特定非営利活動 T・M良薬センター」
- ・銀行「群馬銀行本店 普通 2134150」
- ・郵便局「00160-5-591781」

表紙写真／ミャンマー・ダラー郡 避難所の様子

ロンボークラブ 13



T・M良薬センター ニュースレター

ミャンマー／カンボジア／ネパール



ニュースレター第13号
平成20年6月17日
T・M良薬センター事務局
Tel・Fax : 027-254-2325
E-mail : office@tmrc.jp
<http://www.tmrc.jp>

印刷協力：群馬県沼田幼稚園

ミャンマープロジェクト

サイクロン災害

5月3日未明、上陸直前に急激に発達したサイクロンが南沿岸部を襲った。死者・行方不明者は10万人を超え、被災者は240万人ともいわれている。国際支援も難航し、二次災害も懸念された。TMRC ヤンゴン事務所のレンガ屋根が飛ばされ、水浸しとの報告を受けた。ミャンマーは雨季を迎えていた。

現地調査へ

支援要請を受けて、田代副理事長と小川光星会員が6月7日から12日まで被災地へ渡航した。被災者間の伝染病予防に当会顧問の並里まさ子医師から抗生物質を2万錠調達して、被災地で活動中のミャンマー医師会を通して被災者に配布した。通常大人5日分として1333人分になる。



全て配布した。この度の1次支援ではヤンゴンと、エヤワディ川を渡ってデルタ地帯東部を視察した。

また被災者から「食料や飲料水、毛布等は配給が始まっているが、蚊が大量発生して困っている。蚊帳がほしい」との要望を受け、出発前に現地の業者に100世帯分発注したが、調査地ダラー郡の避難所には186世帯が集まっていたため急遽もう100世帯分調達し、



〔倒壊した家屋〕最大風速200mのサイクロンに襲われ、静かな穀倉地帯は一夜で地獄と化した。竹とビニールでできた家は簡単に飛ばされた。生き残った人々は、「人間が目の前でどんどん飛ばされていった」と、恐怖を語った。

風が止み穏やかな天気のもと、建物の下敷きになったり、流されたりした死体が次々と積まれていった。大木にしがみついて雨風に耐える中、力尽きた子どもや老人が次々と消えていった。

〔食事の配給を待つ避難民〕被災地ではその村の寺院が避難所になっていた。エヤワディ地区では村ごと消え去ったところも多い。子を持つ母達は村々に備蓄されている、4m四方の米櫃の米の中に赤子を突っ込んで守ったという。



〔炊き出しをする僧侶達〕被災から1ヶ月半が経過し、政府から配給される救援物資は寺院内に保管されている。家族と集落が消え、種籾を失ったデルタ地帯の人々に希望はなく、食事をするのもやっとの思いだった。

「死者は30万？40万？何人亡くなったかわからない。サイクロンの規模を知っていたのに、伝達されなかった。人的被害が大きい。」国民の間で不満があふれている。

この度抗生物質を届けた「Myanmar Medical Association」は、医師10人＋スタッフ（看護婦等）数人のチームを作り、サイクロン発生からすでに24回被災地へ派遣している。無償の救援活動で1万人以上の被災者を診察・治療していて、次回からの派遣で本薬を処方する計画だ。PDS（心的外傷後ストレス障害）患者が増加しているのと、炊き出しで栄養が偏るため、精神安定剤や総合ビタミン剤などの需要が増えている。

避難所で配布した蚊帳は上部を結びつけると1.8m×1.3m×1.4mの直方体になり、柄のある薄い布生地できているため、外から中の様子が見えない。家族生活の最低限のプライバシーを守るものだ。

キンマウンウィン・ダラー郡長は「援助物資は余るほど届くが、我々は全てを失った。今一番必要なものは学校だ。子ども達が勉強を続けることが大人達の唯一の希望であり責任だ」と、学校建設の支援を求めた。



倒壊した家屋を建て直している様子／1軒2万円で再建できる

この度の救援活動では全国に義援金をつのり、援助物資の費用や現地活動費等に活用させていただきました。ここに現在までの支援団体を掲載し、改めて深甚なる感謝を申し上げます。

- ・日蓮宗神奈川一部社教会様
- ・東京南部社会活動部会様
- ・常真寺様
- ・日蓮宗和党会様
- ・安藤海潤様
- ・山内吾郎様
- ・尾谷卓一様
- ・練馬妙延寺様
- ・五反田本立寺様
- ・大阪妙光寺様
- ・中島大成様
- ・芝組清和会様
- ・中島智子様
- ・IDEA JAPAN 様
- ・おうえんポリクリニック様
- ・名古屋市妙光寺様
- ・広島県福山市妙法寺様
- ・八王子善龍寺様

ネパールプロジェクト

シャカ族支援の銀製香盒

「うん！よくできています。どんどん上手になりますね。」ネパールから届いた荷物を開けて小池店主は喜んだ。現地のシャカ族が作る銀製の香盒が届き、さらに追加発注された。

現在、山梨県身延山の門前町にある松司軒仏具店で、シャカ族の手作り香盒が販売されている。ねじ式ではなく空圧で蓋が閉まる、凸凹を最小限に抑えたシンプルなデザイン。手にフィットする丸みを帯びた美しい銀の香盒は、店主のこだわりの一品。しかし100%手作りのため、現地から届くのに少々時間がかかる。そこで10個ずつ継続的に発注することが決まった。引き物などの大量注文に対応するために、ある程度店舗に確保しなければならないからだ。

その昔カピラバストウから逃れたシャカー族は、今では全土で10万人程暮らしているという。昨今専制政治が続いていたネパールには仕事がなく、若者は中東石油国に流出。07年春ついに王制が倒れ、国民選挙により政権を取ったのは毛沢東派だった。国民が最後の望みを託したのだ。期待と不安の入り交じる釈尊生誕の国を、我々が見守っていく必要があるだろう。

「シャカ族の香盒」



店頭価格 15,000円

引物等大量注文の場合は割引有

桐箱付き

直径 5.3cm

深さ 2.5cm

重量 54g

銀製・手作り

宗紋、山紋等刻印可能

- ・お時間がかかる場合があります。お早めにご注文ください。
- ・シャカ族の支援になります。ご協力お願いいたします。

カンボジアプロジェクト

妙法学校完成

近所に学校がなく通学出来ない子ども達のために学校を建てる「サッダルマ・リピサーラ（妙法学校）プロジェクト」で、日蓮宗と熊谷学寮1期生有志がドナーとなって2007年9月からタケオ州ポアンピール・パゴタ内に建設していた学校がこの度完成し、6月3日～7日の日程で落慶式ツアーを実施した。ツアーに合わせ、2校目の「妙法学校」出資者となった東大阪市宝樹寺の和田龍昌氏が訪問団長として参加し、建設の調印式と起工式を執り行った。

訪問団（敬称略）：和田龍昌、和田照子、小島知広、小野文瑠、小川志道、作田光照、新井恵裕、藤井淳至、顧問として持田貫信日蓮宗伝道部国際課課長が同行した。



訪問団は6月4日、「内戦と災害の犠牲者に祈りを捧げる集い」に参加し、カンボジア僧と共に供養を修し、日蓮宗から派遣された池上要靖師の法華経講義を聴講した。



本事業の窓口になっている同国宗教文化省にて2校目のサッダルマ・リピサーラ調印式が行われる。中央にキン・ミン副大臣、隣にドナーの宝樹寺住職と小野理事長。



サッダルマ・リピサーラが完成したのは、プノンペンから南へ約75kmの最貧困地帯タケオ州トラング地区。村の入り口には村人達が両側に長蛇の列を作って大歓迎。子ども達も両国の旗を振って開校を喜んだ。（オープニングセレモニーの様子）

この度新設の学校は5教室のレンガ作り平屋建て。机もイスも新しい、綺麗な教室に入って生徒達は少し緊張気味。テレビ放映もされた。

場所を移動し、2校目の建設予定地へ。村人全員で学校建設の陳情書を提出してから1年、ついに夢が現実となった。

アントマイ・パゴタ内で2校目の妙法学校建設にあたり和田氏を導師に地鎮式を行った。その後カンボジアの儀礼に沿って起工式を行い、懇親会が開かれた。和田夫妻はお土産のキャンディを1人1人に配り、村人達と親睦を深めた。

帰国後和田氏は「電気も無い貧しい村が多くて驚いた。1日も早く学校に行けない子ども達に学校をプレゼントしたい。」と、もどかしい思いでいっぱいの様子。同行した持田課長は、「意義深いツアーだった。現地の仏教会から感謝の思いがひしひしと伝わってきた。妙法学校建設を決めた和田氏に改めて敬意を示したい。」と、事業の前途を祝した。

